

Tamagawa Art Gallery Projects

2011—2012, 2012—2013

Tamagawa

Art

活動報告書

ACTIVITY REPORTS

Gallery

Projects

玉川大学芸術学部

College of Arts, Tamagawa University [編]

Tamagawa Art Gallery Projects (以下 TAG Projects) は、玉川大学芸術学部の教員と学生が主体となり、芸術に関する展覧会や講演会、イベントの企画・運営を行う非営利の活動の総称です。その目的は、本学部の研究・教育成果を積極的に地域社会を始めとする学外に公開すると同時に、学外や国外の芸術活動を学内に紹介することにより、双方向の風通しの良い交流の場を提供することにあります。

この活動は、2009年にビジュアル・アーツ学科の教員が中心となり、学生を巻き込んで試験的に開始されました。2010年以降は玉川大学芸術学部共同研究「大学内オルタナティブ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定」として助成を受け、メディア・アーツ学科の教員も参加し、継続されています。そして、今回の報告書は2011年3月に発行された創刊号に続き、2011年4月から2013年3月の概要をまとめた第2号となります。

大学内オルタナティブ・スペースとは、通常は授業や作品制作、各種行事で使用されている玉川大学大学3号館一階のホール及び102教室やその周辺を指しています。TAG Projectsでは、その空間で、大学ならではの柔軟性を持ったユニークな活動を意識し、既成のジャンルにとられないクロス・ジャンル型のプロジェクトを展開してきました。具体的には、国内外のアーティストの作品展、トークやパフォーマンス、学内外の専門家による美術史学関連のレクチャー、教員や学生による作品展示や講評会、授業の発表などです。幸い、学生の主体的な企画も増え、活動が少しずつ認知されて学外からの来館者が増えるなど、これまでの活動の成果が現れつつあります。

今後は、さらに内容を充実させることはもとより、インターネットやこのような紙媒体の報告書等を通じて情報発信にも尽力していきたいと考えていますので、今後もTAG Projectsの活動に注目して頂ければ幸いです。

未筆ながら、これまでのTAG Projectsの活動は学内外のアーティストや評論家の方々、学生や教員、その他多くの関係者のご協力、ご支援無くしては成立しませんでした。ここに厚く感謝申し上げます。

TAG Projects 2012-2013 運営代表
藤枝 由美子 (芸術学部ビジュアル・アーツ学科 准教授)

2011—2012

01	point Tokyo—Okinawa 2010-2011展	04
02	第二次工芸 島本了多展 同時開催 大学美術展展覧会	06
03	節電うちわプロジェクト 2011	08
04	泉 太郎 [動かざる森の便利、不便利]展	10
05	藤枝 由美子 [mother]展	12
06	JAPAN BLUE	14
07	Oliver Schneller, Wu Xing オリヴァー・シュネラー [五行]	16
08	山口 勝弘 [三陸レクイエム]展	18
09	Café de Tamagawa 20名によるカップ展	20
10	“Cradle”	22

2012—2013

01	トーク・イベント パンタグラフのモノづくり14年分コマ送り	24
03	節電うちわプロジェクト 2012	26
04	[思想採集]展	28
05	特別講演会 森美術館 [アラブ・エクスプレス]展を通してみるアラブと日本	30
06	JAPAN BLUE	32
07	林 三雄 [みつおのみつつの仕事]展	34
08	公開レクチャー ドクメンタも急襲!!	36
09	日英アーティストによるドローイング作品展 山口 勝弘 × ニック・ウェドレイ	38

会期 2011年5月9日—5月13日
会場 玉川大学3号館102教室
ギャラリー・トーク 「pointをつなぐ」 5月13日 17:00—19:00
企画 東方悠平
広報デザイン 高島功 イラスト／栗原千亜紀
協力 KAITEN

報告

2010年から1年間、玉川大学（東京）と琉球大学（沖縄）との間で行われた共同アートプロジェクト。

互いに「距離」をモチーフにした作品を制作し、その交換を複数回行いました。結果を展覧会という形で発表しました。

point Tokyo—Okinawaのルール

1. 郵便を使う。
2. 時間と距離をテーマにする。
3. 初回は、沖縄側と東京側の双方が同時に作品を送り合う。2回目以降は到着した作品をベースに、応答をしたり、さらに再びイメージを膨らませて作品を送り合うことをくりかえす。
4. 双方で制作した作品について写真や映像で記録を取り、最終的にその結果を報告／交換しあう。

2010年—2011年
東京から4回、沖縄から5回にわたって作品が送られた。



参加作家

玉川大学 芸術学部 ビジュアルアーツ学科

野本 直輝（4年）
金子 記子（4年）
栗原 千亜紀（3年）

琉球大学 教育学部 美術教育専修

市村 友美（卒業生）
具志堅 裕介（3年）
上地 愛乃（3年）
長島 瑠（3年）

*いずれも当時

Tamagawa
Art Gallery Projects
2011—2012 no. 01



現代美術と「距離」

これは「距離」という目に見えないものについての展覧会です。

現在、移動速度や通信速度の高速化により、これまでの距離についてのイメージは劇的に刷新されてきています。そういった状況のなかで、本プロジェクトでは「距離」の視覚化を一つのテーマとして取り組みました。東京と沖縄の離れた二点の距離という具体的なモチーフを手がかりにして、今現在を生きる学生たちがそれぞれの感覚で捉えた「距離」を提示しています。

作品の制作にあたっては、郵便、宅配便、E-mailやSkypeなどさまざまな手段を用いて、二点の間で、物や情報が行き来しました。現実存在する「距離」がもたらす不便さやディス・コミュニケーションはさまざまな困難を伴いましたが、同時に、限定された状況による気づきや、誤読からの発展などたくさんの可能性を感じるものとなりました。

本来は目に見えないはずのものを可視化して、展覧会というフォーマットに無理矢理当てはめているのですから、そこには正解というものは存在しません。上手くまとめられた作品があれば、逆になんだかよくわからなくなってしまったものもあるかもしれません。どちらにしても、そこに至った過程にまで考えを巡らせてみてください。きれいに結論の出なかったアプローチにこそ、むしろ「距離」に対する現在進行形の新しい感覚が投影されているのではないのでしょうか。まだ誰も言葉で定義づけられないような概念の片鱗に今まさに触れているのだと思うとゾクゾクしてきませんか（僕はします）。一体それが何なのかよく分かっていないけれど、絶対に存在するその何かについて考えるとき、現代美術はとても効果的だと思います。

東方 悠平（ビジュアル・アーツ学科2008—2011年度 助手）

Tokyo—Okinawa



会期 2011年5月19日—6月1日
会場 玉川大学3号館102教室
ギャラリー・トーク 5月27日 17:00—18:00
企画 東方悠平
広報デザイン 高島功
協力 KAITEN

陶芸の域を越えて

多彩に展開される 島本の世界を

過去作品から怒濤の展示。



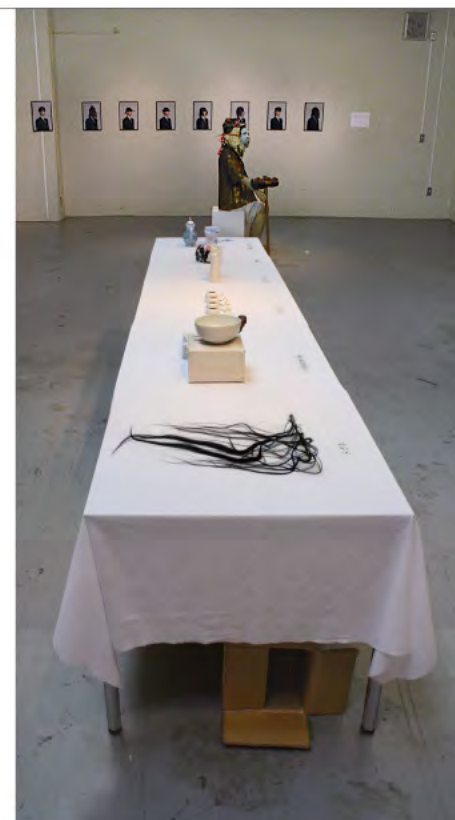
島本了多 しまもと りょうた

略歴

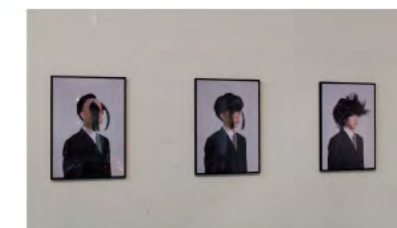
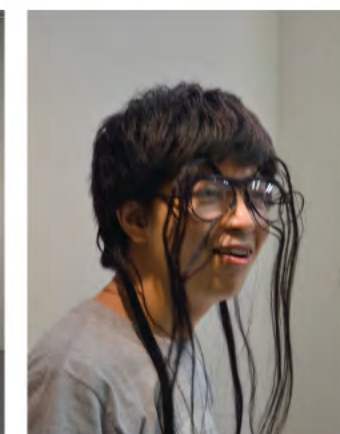
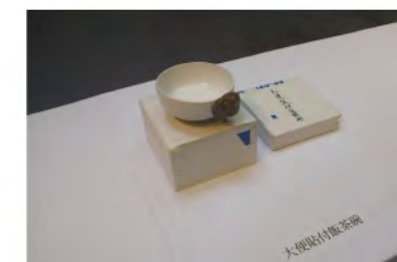
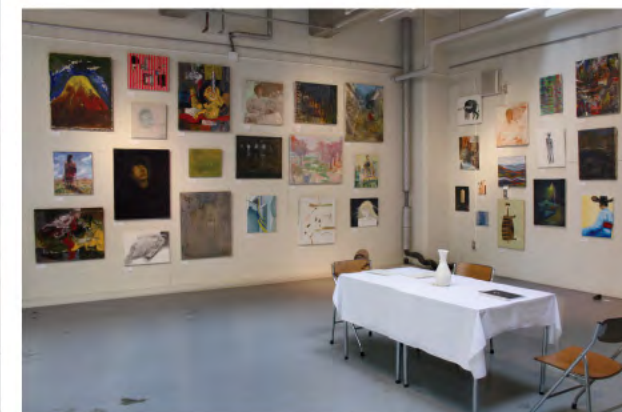
1986年 東京生まれ
2007年 [大学美術展2007] 多摩美術大学
2008年 [大学美術展2008] 多摩美術大学
2009年 第12回 岡本太郎賞入選
2009年 多摩美術大学工芸科卒業
2010年 第13回 岡本太郎賞入選
2010年 3331アンデパンダン展出展
2011年 第14回 岡本太郎賞入選
2012年 第15回 岡本太郎賞入選
2012年 アンデパンダン展 クワクポリョウタ賞
2013年 3331アンデパンダン・スカラシップ展 vol.3

報告

東方 悠平 (ビジュアル・アーツ学科 2008—2011年度 助手)



Tamagawa
Art Gallery Projects
2011—2012 no. 02



Shimamoto Ryohita



会期 2011年6月13日—6月17日
会場 玉川大学3号館ロビー
企画 情報デザイン学生有志
竹内聖 椿敏幸
うちわ配布活動
2011年7月2日—8月6日



概要

東日本大震災の状況を受け、情報デザインを学ぶ4年生有志が立ち上げた「節電うちわプロジェクト」です。

「HOPE&LOOP」(つづく希望、つながる希望)というテーマでデザインを募集した“うちわ”20点が展示され、投票で選ばれたデザイン2点を計1500枚制作し、学内および町田市内各所にて配布しました。

椿 敏幸 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)



ワークショップ

配布活動

うちわ配布活動

投票で選ばれたデザイン2点を計1500枚配布しました。

7月2日 14:00— 町田市立陸上競技場

・JFL公式戦 FC町田ゼルビア「玉川マッチ」

・ワークショップ「うちわを彩ろう!」

7月7日 10:00—13:00 町田市役所

8月6日 16:00—18:00 「ゆかた祭り&風の盆」ぽっぽ町田特設会場



泉太郎「動かざる森の便利、不便利」展

会期 2011年9月26日—10月2日
会場 玉川大学3号館102教室
トーク・イベント 9月26日 17:15 19:00—21:00
泉太郎 × 栗田大輔 × 林卓行
企画 山中悠

Tamagawa
Art Gallery Projects
2011—2012 no. 04



会場風景

「伝える」を意識することの重要性

私たちは日常の中で、多くの映像表現に触れている。当時私が所属していたメディア・アーツ学科の授業でも、制作や鑑賞を通して、様々な映像表現に触れる機会が多かった。しかし、それらの授業の中で制作するときに、自分は一体なにを表現すればよいのかわからなくなったことがあった。「映像で表現する意味とはなんなのか」「映像だからこそできる表現方法とはなんなのか」という問いにぶつかったのである。

そこで、私たちが日常の中で接する映像表現とは違う作品を制作する、現代美術作家の泉太郎氏の展覧会を通して、映像だからこそできる表現やその意味について芸術学部と学生と追求したいと考え、本展覧会を企画した。

学外からの来場者も多く、様々な人から意見をいただくことができた展覧会となった。企画者として関わったことを本当にうれしく思う。しかし、いまこの展覧会を振り返っても多くの反省が残る。

なかでも最も難しく重要であったと感じることは、「他者に伝える」ことである。それは、広報活動が十分にできなかったということに強くあらわれた。

しかし、もっと重要視すべき点がある。それは、「誰にどんなことを伝えたいのか」という展覧会として最も重要な部分を、自分の中でしっかり持つことができていなかったということである。そもそも作品鑑賞とは、作家が鑑賞者にあるメッセージを伝えたり、社会的にも一般化できるような問いを共有したりということを可能にする。この展覧会においては、企画者であ

る自分が、泉氏の作品による展覧会を通して、鑑賞者が得ることのできるメッセージや価値を捉えておくことが必要であった。加えて、それらを言語化できるレベルで整理することにより、はじめて展覧会を企画し、そのメッセージを他者に伝えることができただろう。当時の私は学生と「映像表現について考えたい」という漠然とした気持ちで止まってしまった。それでは、他者を巻き込むことも広報することもできない。「他者に伝える」ことは、想像以上に難しいことであった。

では、その難しさはどのように乗り越えることができるか。もう一度振り返ると、二つの解決策が考えられた。

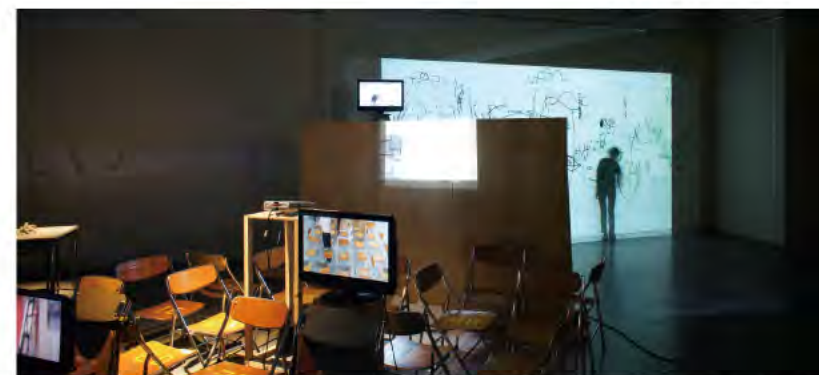
一つは、自分がなにかをしたいと感じたきっかけ(動機)を掘り下げ、他者と共有できるレベルまで考え整理することである。そしてもう一つは、美術のことだけではなく、社会の状況やまわりの環境に敏感になり、他者と共有すべき価値のある問いはなにか、ということをつめることである。これらと向き合うことで、はじめて鑑賞者を意識した有意義な企画をすることができただろう。

それでもこの展覧会は、自分にとって今後の活動にもつながる非常に素晴らしい機会であった。この展覧会が多くの協力があって開催できたことはいまでもない。作家の泉太郎さんや大学には感謝の気持ちでいっぱいである。今後も玉川大学で学んだことに立ち戻りながら、有意義な活動をしていきたい。

山中悠(当時メディア・アーツ学科4年生/
現千葉大学大学院教育学研究科教科教育科学専攻)



《バウンドしないボール、鯉は立つ》



会場風景／手前は《目玉焼き、フライパンの罌は濃い》



《キツツキと槍の無い戦》

トーク・イベント

泉太郎 × 栗田大輔 × 林卓行

泉太郎(アーティスト)

栗田大輔(美術批評/メディア・アーツ学科 非常勤講師)

林卓行(美術批評/ビジュアル・アーツ学科 准教授)

企画者によるギャラリー・トーク

メディア・アーツ学科の授業、「クリティック・セミナー」と連携して企画者の山中さんによるギャラリー・トークが行われました。

報告

泉太郎氏は2000年代半ばより『夏への扉——マイクロ・ポップの時代』(水戸芸術館、2007年)などへの参加や、個展『泉太郎: こねる』(神奈川県民ホールギャラリー、2010年)で注目を集め、本展と同時期には横浜トリエンナーレ2011、そしてその後も『リアル・ジャパネスク』(国立国際美術館、2012年)などの大型展に参加。現在もっとも注目を集めるアーティストのひとりです。その泉氏の個展が、氏と交流のあった学生、山中悠さんの企画によって実現しました。会場の空間の内外をぞんぶんに使った、大規模で緻密な映像インスタレーションが複数展示され、さながら美術館やギャラリーの一室のような空間が学内に実現。パワフルな展示になりました。作品制作の段階からおおくの本学学生が関わり、実力のあるアーティストと学生の協働が実現したのも、本展の意義。話題のアーティストの展示とあって学外からの関心も高く、いくつかの有力なアート情報・批評ウェブサイトにも、本展を紹介する記事やレビュー、批評も掲載されています。

林卓行



《目玉焼き、フライパンの罌は濃い》



《回転する胃腸の首輪》

会期 2011年10月7日—10月13日
会場 玉川大学3号館102教室
トーク・イベント 10月13日 17:00—18:00
企画／出品 藤枝由美子

趣旨

玉川大学教員として主に実技科目を担当していますが、授業では自分の作品について紹介する機会がほとんどありません。しかし、学生にとって教員の作品を観る機会を持つことは、一人の作家の作品や考え方と向き合う機会であると同時に、大学での学びが教員のどのような授業外での研究や活動に支えられているのかを知る教育的効果があると考えました。

Tamagawa Art Gallery Projects 2011—2012 no.



報告

本展では、2004年から発表している鏡を用いた椅子のインスタレーション・シリーズより、2011年夏に米国ドレクセル大学で発表した作品を展示しました。

この作品は、凸状の鏡面加工を施したガラスを椅子の背もたれや座面に用いることで、各椅子が互いに他の椅子やその展示空間、また他の鑑賞者や観賞者自身を写し込んでいます。観ることでと観られること、物事の始まりは何か、存在の原初は何かという問いがテーマの作品で、『mother』というタイトルとしています。

トーク・イベントでは、学生時代に「愛と造形」というテーマのもと鉄の椅子や人が入る箱を制作していた頃から、アイドル歌手のプロモーションビデオの舞台装置の仕事、日本とイギリスでの制作発表活動を経て現在の日本画画材を含むミクスト・メディアのインスタレーション作品に至るまで、自作のコンセプトについて、また素材や技法について解説しました。

藤枝 由美子 (当時ビジュアル・アーツ学科 助教)

mother



トーク・イベント



会期 2011年10月18日—10月22日

会場 玉川大学3号館102教室

報告会 10月19日 17:00—18:00

講演会 「国際教育交流の可能性について」 藤枝由美子

10月19日 18:00—19:00

関連授業 海外特殊研究(ドレクセル)

報告

2011年の夏、授業科目「海外特殊研究(ドレクセル)」を履修した学生が一週間のアメリカ研修に行き、ドレクセル大学にてテキスタイルの作品展、そしてテキスタイル美術館にてワークショップを開催しました。化学染料が主流の現代、日本の天然染料を用いた技術はテキスタイルの専門家やドレクセル大学学生に大変興味深く受け入れられ、日本の藍染めの伝統と現在を伝えてくることができました。

本展はその活動を紹介する凱旋展です。型染めや絞り染め、友禅染めなどの技法で制作された作品14点を展示し、記録映像の上映や報告会、関連講演会を行いました。

藤枝 由美子(当時ビジュアル・アーツ学科 助教)

企画者

榎本 恵花(ビジュアル・アーツ学科4年)

小野 裕梨恵(ビジュアル・アーツ学科4年)

中谷 圭介(メディア・アーツ学科4年)

出品者

吉田 茉莉子(ビジュアル・アーツ学科3年/出品のみ)

石本 那榮(ビジュアル・アーツ学科4年)

小野 真澄(ビジュアル・アーツ学科4年)

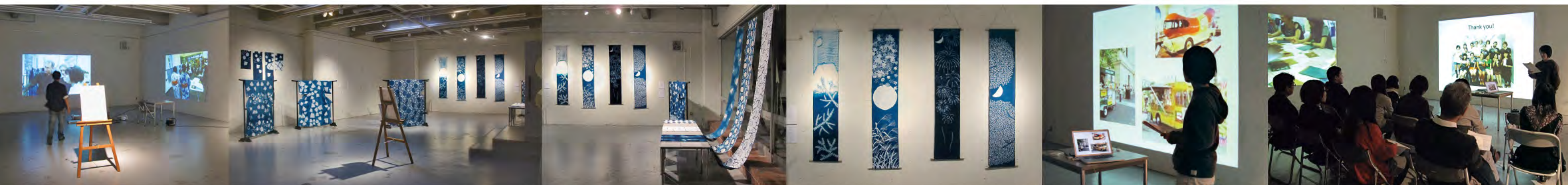
藤田 悠里江(ビジュアル・アーツ学科4年)

高橋 里沙子(ビジュアル・アーツ学科4年)

*いずれも当時



JAPAN BLUE



会期 2011年10月25日—26日
会場 玉川大学3号館102教室
プログラム コンピュータ制御によるサウンド・インスタレーション
2007/2011年
公開レクチャー 10月26日 17:00—19:00
企画 ジョナサン・リー

開催趣旨・概要

In Tamagawa University's Tamagawa Art Gallery, German composer and sound artist Oliver Schneller, professor of composition at Hannover University of Music, Drama and Media, exhibited his installation "Wu Xing" for two days and gave a lecture entitled "Architectural Space as an Aural Parameter".

To create a collaborative work that presented a new interpretation of the original installation, students were asked to submit images and sounds based on the theme of "Wu Xing" that would be incorporated into the exhibition. Students from the Department of Visual Arts selected a variety of photos, graphics and images, and worked on the lighting and exhibition design. Students from the Department of Media Arts prepared audio files that were incorporated into the computer system that controlled the installation.

In his program notes for the original audio-visual installation for loudspeakers and video projection, Prof. Schneller describes "Wu Xing" as a "computer-controlled virtual biotope," representing the dynamic cycle of the five phases in the Chinese system of elements. For him, the process is "a metaphor for a perfectly balanced recursive cyclical system" as it is found within ourselves and in the environment around us. Although cyclical, the system is designed so that each cycle is unique in timing and processing of its audio and visual elements.

For his lecture, Prof. Schneller described how sound and music can be arranged in an architectural space for specific purposes, drawing on examples of instrumental and vocal music, from classical to contemporary works. He also talked about how in some of his own concert and installation works the separation and placement of sound within a particular space can enhance the level of immersion. In the case of installations, this also allows for various ways to experience different content.

For Tamagawa students this provided an opportunity to interact directly with an international artist through artistic expression and see how their work could be integrated into a new collaborative context. In addition, they also had a chance to practice their English listening and conversation skills in a practical setting, dealing with subject matter in the arts.

ジョナサン・リー (メディア・アーツ学科 准教授)

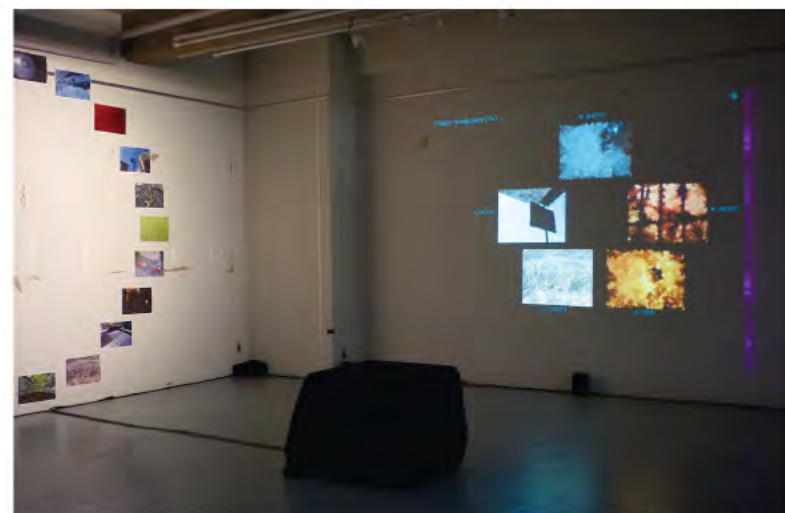


公開レクチャー

Tamagawa Art Gallery Projects 2011—2012 no. 07



《五行》の生物空間／映像映写の部分



インスタレーション風景



学生とのコラボレーション／画像



公開レクチャー

Wu Xing

公開レクチャー 自作[五行]について

講演者 オリヴァー・シュネラー
ハノーヴァー音楽大学 教授 [作曲]

通訳 ジョナサン・リー 准教授, 林 卓行 准教授 (英語による講演)

関連授業 メディア・アーツ学科「様式研究B」
ビジュアル・アーツ学科「現代芸術論概説」

会期 2011年10月7日—10月13日
会場 玉川大学3号館102教室
企画 藤枝由美子

Tamagawa Art Gallery Projects 2011—2012 no. 08

趣旨

アーティスト山口勝弘氏は「実験工房」のメンバーの一人として、またメディア・アーティストとしてメディアを用いた作品で知られていますが、この10年来、絵画作品も多数手がけています。本展は山口氏の最近作より、絵画31点と映像作品3点を紹介しました。

報告

山口氏の最近作の中から、東日本大震災をテーマとし、人と水を描いた「三陸レクイエム」シリーズを展示しました。メディア造形作品と比較すると最近作である絵画作品はまだあまり展示される機会が少ないため、山口氏の多岐に渡る創造の一端を知る貴重な機会となり、学外からも多くの方にお越しいただきました。

藤枝 由美子 (当時ビジュアル・アーツ学科 助教)



Sanriku Requiem



Café de Tamagawa 20名によるカップ展

会期 2011年11月21日—11月25日
 会場 玉川大学3号館102教室
 企画 椿 敏幸
 クロージングイベント 出品作品を使ったカフェパーティー
 11月25日 17:15—19:00 入場無料 先着40名

企画趣旨／報告

本学陶芸ゼミの教員・卒業生・在校生20名によるカップ展。
 展示空間をカフェに見立て、それぞれテイストの異なる20名の
 カップを展示。
 身の回りにある当たり前の存在を再認識し、陶芸の持つ多様性
 を改めて感じてもらうための試みであった。
 展示したカップを実際に使用したイベントにも多くの方に参
 加していただき、賑やかなカフェを演出できた。

椿 敏幸 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)

出品者

教員

高山 典子

椿 敏幸

卒業生

大川 和宏 (文学部芸術学科 1994年卒業)

高津 潤一郎 (文学部芸術学科 1996年卒業)

村松 淳 (文学部芸術学科 1996年卒業)

池田 大介 (文学部芸術学科 2001年卒業)

安芸 俊郎 (文学部芸術学科 2004年卒業)

北川 チカ (文学部芸術学科 2005年卒業)

松本 良太 (ビジュアル・アーツ学科 2006年卒業)

吉田 聡 (ビジュアル・アーツ学科 2009年卒業)

松永 天紀 (ビジュアル・アーツ学科 2009年卒業)

関 春奈 (ビジュアル・アーツ学科 2009年卒業)

小野 瑠生 (ビジュアル・アーツ学科 2010年卒業)

在校生

金林 真一郎 (ビジュアル・アーツ学科4年)

橘 昌依 (ビジュアル・アーツ学科4年)

古澤 あかね (ビジュアル・アーツ学科4年)

柳澤 慧 (ビジュアル・アーツ学科4年)

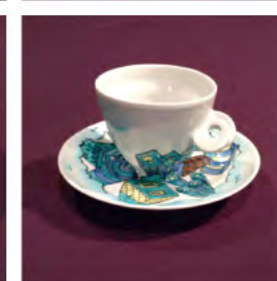
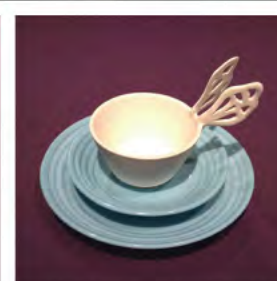
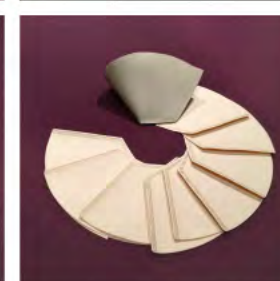
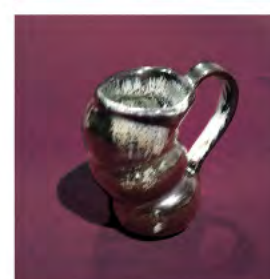
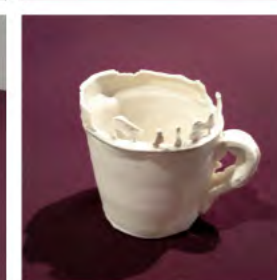
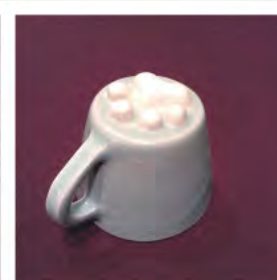
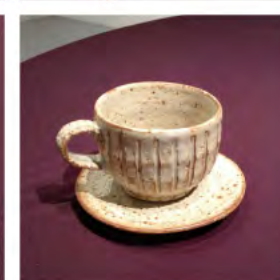
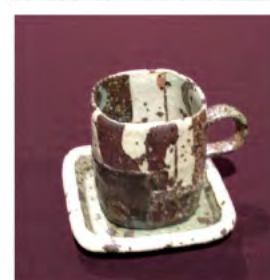
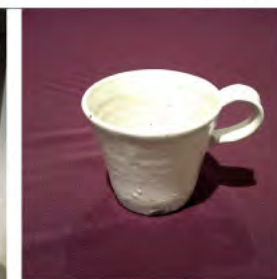
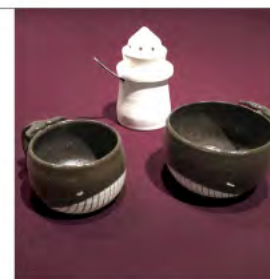
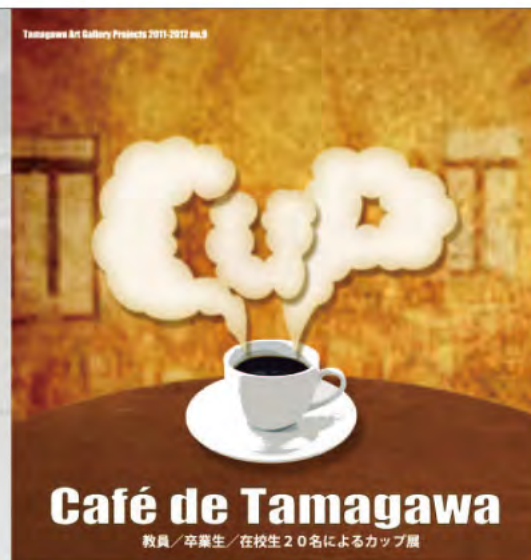
奥墨 美香子 (ビジュアル・アーツ学科4年)

吉江 彩 (パフォーミング・アーツ学科4年)

迫田 七海 (ビジュアル・アーツ学科3年)

*いずれも当時

Café de Tamagawa



会期 2011年11月28日—12月2日
会場 玉川大学3号館102教室
出品者によるギャラリー・トーク 12月2日 17:00—19:00
各出品者が自作のまえで来場者に対して解説いたしました。
企画／出品 阿美千尋 金子記子 熊谷勇樹 栗原千亜紀 内藤青也
協力 野口博(写真家／当時ビジュアル・アーツ学科 非常勤講師)

Cradle

報告

「写真」の授業を履修していた学生たちの自主企画による写真展です。“Cradle”とは英語で「ゆりかご」を意味します。揺籃期にある彼らの写真の、不安定なみずみずしさからこのタイトルがつけられました。いずれも身の回りにある人物や風景の断片を切り取ったドキュメンタリー・スタイルの写真が中心ですが、情感に満ちたものから感情を排した作品まで多彩です。

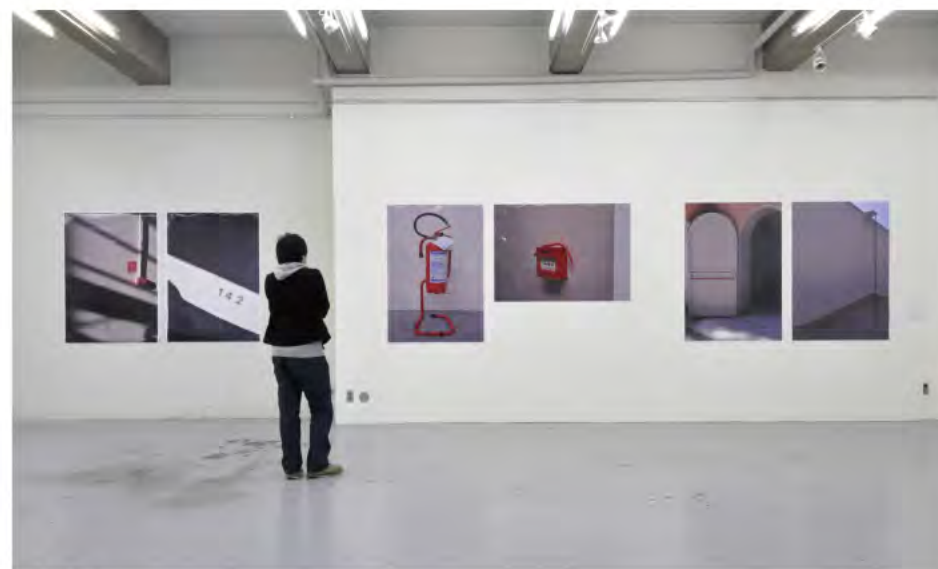
熊谷くんは卒業後スタジオ・カメラマンとして技術の研鑽を重ねながら作品を発表。作品『贅沢』で新進写真家の登竜門として知られる『1_WALL』展(株式会社リクルート主催)2011年のグランプリ受賞を経て、その報賞として開かれた個展『そめむら』(2012年)でも好評を博しました。

金子さん、阿美さんはその後、自身の卒業プロジェクトとして、本展出品作をブラッシュ・アップした作品を制作。学修を継続させています。

林 卓行(ビジュアル・アーツ学科 准教授)



ギャラリー・トーク



金子記子 作品



栗原千亜紀 作品



熊谷勇樹 作品



内藤青也 作品



阿美千尋 作品

学生のコメント

学内での展示は、学外での展示より得るものが多かった。観る人が身近にいる人であるほど、納得できて、ためになる意見を得ることができた。学内での展示スペースをもっと活用すべきだったと思った。

熊谷 勇樹(パフォーミング・アーツ学科 4年)

“Cradle”には「ゆりかご」「発祥地」という2つの意味があります。大学はゆりかごのようにあたたく守られた場所でしたが、この展示が各々にとっての出発点となり、内から外へと出て行くことを期待してつけたタイトルです。作品が集まった時 どう見え、どう影響しあうのか、異なる視点や閃きを生む場だったと思います。

金子 記子(ビジュアル・アーツ学科 4年)

コンセプトも被写体も展示方法も異なった5人の写真作品を同じ空間に展示することで、ひとりひとりの持ち味を明確にすることができた。そして、展示空間はただただ5人の寄せ集めというだけでなく、お互いがお互いを刺激し合い、良い緊張感のある展示空間となった。

阿美 千尋(ビジュアル・アーツ学科 3年)

物や人物の滑稽だな、と思える姿を撮ったスナップ写真を出品しました。この世界には外を歩いているだけで微笑ましい出来事がたくさんあるなと写真を撮っていて感じます。今回、5人の作品と一緒に展示されましたが、大きさや数も様々でした。それぞれの世界観は観た人にはどう感じられたのか気になるところです。

栗原 千亜紀(ビジュアル・アーツ学科 3年)

“Cradle”展は私のそれまでの写真表現の総括だった。制作時期と使用機材ごとにセクションを分けての展示を試みたが、こうして活動全体を一望すると、形式以外に写真感覚の変遷が感じ取れる。カメラは写す内容のみならず、私の写真感覚や認識に干渉し、それらを変えてしまう。カメラは自分と世界の間の透明な接点ではなく、もっと言い知れぬ何かとして身体的に私に食い込んでいるものであることがよくわかった。

内藤 青也(ビジュアル・アーツ学科 2年)

*学年はいずれも当時

パンタグラフのモノづくり14年分コマ送り

日時 2012年6月12日 17:00—19:00
会場 玉川大学3号館102教室
ゲスト 井上仁行（パンタグラフ主宰）
企画 坂本のどか

企画趣旨

横浜にアトリエを構え活動するクリエイティブ・ユニット、パンタグラフの井上仁行氏をお迎えしたトーク・イベントです。彼らが手がけて来たモノは大小様々、コマ撮りアニメや立体造形、イベント企画に共同アトリエ設立まで。大学卒業後友人たちと共同アトリエを構えることから始まり今年で14年目、ユニークで多岐にわたる彼らのシゴト、そのアイデアの源とは？2時間では収まるはずもない彼らの歴史、ぎゅっと濃厚なコマ送りでお話いただきました。

パンタグラフ



1998年設立。
広告、雑誌表紙、CDジャケットのイメージビジュアルからアニメーションムービー、楽曲制作、アートイベントの企画制作まで幅広い分野で活動。立体造形を得意とし写真やアートアニメーションで多数の作品を発表しているクリエイティブ・ユニット。旧スタジオ・ビッグアート。
パンタグラフWebサイト：<http://www.pangra.net>

井上 仁行 いのうえ まさゆき

パンタグラフ主宰。
1973年神戸市生まれ。筑波大学芸術専門学群卒業。
パンタグラフでは造形工作の他、コマ撮りアニメーションのアニメート・ライティング・撮影等も行う。
現在、横浜美術大学他で非常勤講師も務める。以前玉川大学のメディア・アーツ学科で非常勤講師をしていたことも。



制作風景



スタジオ併設 CAFE「喫茶コマドリ」店内



日経パソコン表紙
上《LUNCH-BOOK》2009 / ©パンタグラフ
下《蚊取りドライブ》2010 / ©パンタグラフ

報告

『14年分コマ送り』と題した通り、彼らの膨大な作品群や活動歴を紹介いただくだけで、十分なボリュームと面白みのあるお話が聞けるだろうと思っていました。が、実際に話が進む中で、作品紹介を交えながら井上さんが丁寧にじっくりとお話し下さったのは、作品づくりの根っこにある『アイデア』のお話でした。長年の仕事の積み重ねから、自分の発想方法について井上さんが発見したいくつかのパターンのこと、ゼロからつくるのではなく、既にできているアリモノを使うことで生まれる新たな広がりのこと……。さらに、実際に企業と組んで仕事をする際のクリエイターの立ち位置のこと等々、モノづくりのことも仕事のことも、そんなに話してくれちゃっていいんですか？と思うようなところまでお話しいただいて、あっという間の濃密な2時間でした。PCの画面の中ではなく、机の上で手を動かすことによって生まれるモノづくりで社会と繋がっている彼らの活動は、学生たちも自分に引き寄せて考えやすかったのではないのでしょうか。

坂本のどか（ビジュアル・アーツ学科 助手）

pantograph

Tamagawa
Art Gallery Projects
2012—2013 no. 01



会期 2012年7月9日—7月13日
会場 玉川大学3号館ロビー
企画 情報デザイン学生有志
竹内聖 椿敏幸
うちわ配布活動 2012年8月5日—24日



企画趣旨／報告

節電うちわプロジェクトは芸術やデザインを学ぶ学生が今自分たちにできることを考えて始動させたプロジェクトです。うちのデザイン制作と配布を通して参加者の節電／復興支援の意識を高めようというのが発案のきっかけでした。昨年に玉川大学芸術学部の学生達から始まり、2012年はデジタルハリウッド大学の学生も加わり、またネットを通じた作品応募や投票などにもチャレンジし昨年よりも幅広い活動を行いました。

- このプロジェクトに関わった一人一人に日本の現状を考える意識を持ってもらう。
- 節電うちわの利用を促して節電への協力に繋げる。
- 作品応募という貢献の形を通してアート／デザインを学ぶ学生の復興支援の意識を高める。
- このプロジェクトを通して復興の思いを共有し、また震災の事実を風化させない。

投票によって選ばれた5つのデザインのうちわを10000枚制作し、駅前やイベント会場で老若男女さまざまな方へ配布しました。熱心に話を聞いてくださる方もいて本プロジェクトの目的、復興への想いの共有や意識向上の目的を果たすことができました。

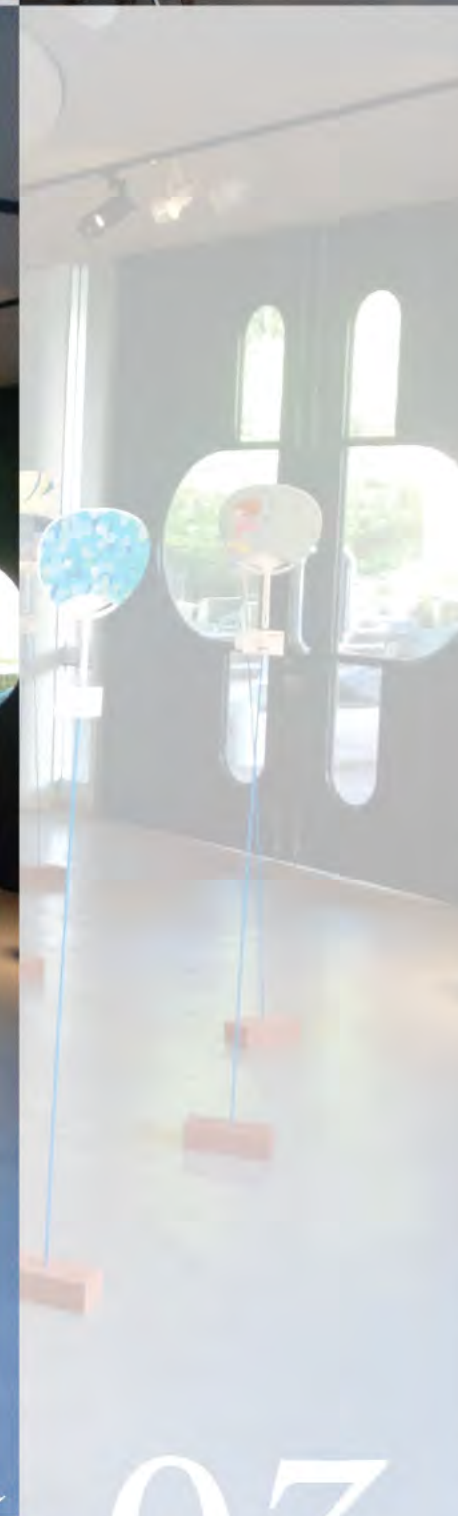
椿 敏幸 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)

うちわ配布活動

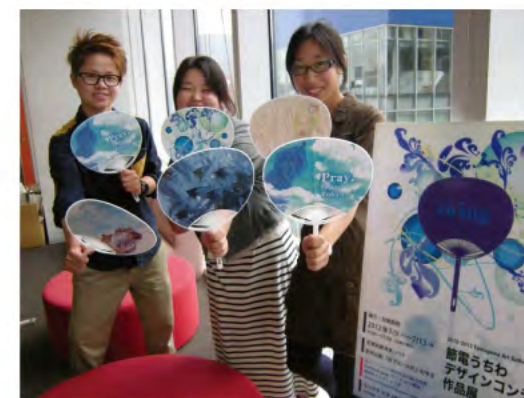
- 8月 5日 16:00—18:00 「ゆかた祭り&風の盆」ぽっぽ町田特設会場
8月 11日 13:00—17:00 秋葉原駅前
8月 12日 12:00—14:00 デジタルハリウッド大学 (オープンキャンパス)
8月 13日 11:00—14:00 町田市役所 (新庁舎入口付近)
8月 19日 11:00—17:00 銀座YAMAHA店／有楽町駅近辺
8月 22日 16:00—18:00 川崎市アートセンター (小田急線新百合ヶ丘駅周辺)
8月 24日 13:00—16:00 玉川大学 大学3号館 (オープンキャンパス)



Tamagawa
Art Gallery Projects
2012—2013 no. 03



配布活動



デジタルハリウッド大学の学生も加わりました。



投票により配布が決まった5つのデザイン

会期 2012年9月20日—10月3日
会場 玉川大学3号館102教室
企画出品者 飯塚茜 増川優希

企画趣旨 〔思想〕の〔採集〕

自分自身の感情や考え、身の回りにあるモチーフを色や形として表し、それを集めて描くことで新たな世界観を表現しました。ボールペンやマジックペンなど、日常生活の中で誰もが使用する画材を使って描いています。そこから生まれた色や形の面白さ、細密に描かれた画面の様々な場所に注目して見ていただきたいです。

飯塚 茜 + 増川 優希

Tamagawa Art Gallery Projects 2012—2013 no. 04

報告

本学で情報デザインと油絵を学ぶふたりの学生の合同展。ふたりを含む学生たちが学外で行なった展示をベースに、校内のおおきな空間を活かした展示にしました。細密な要素を反復する作風はふたりに共通していますが、その展開の方法に変化と多様性のうかがえる展示となりました。

林 卓行 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)



会場風景



Iizuka



学生コメント

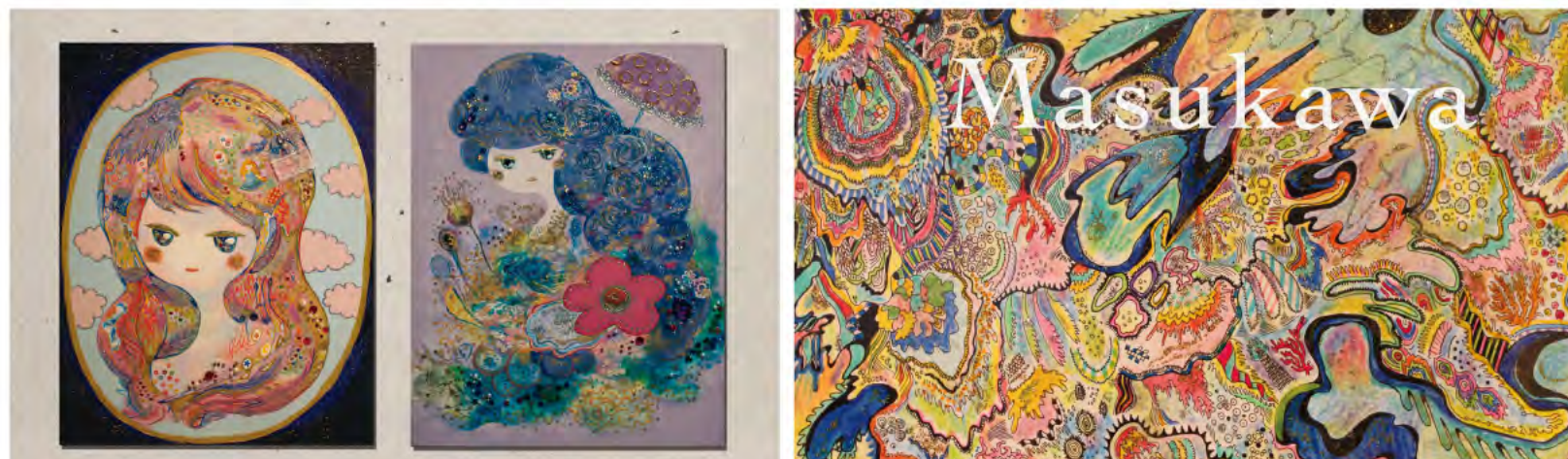
今までに色々な展示に参加して来ましたが、一番納得のいく展示になりました。

わたしはこの展示会を開催するにあたり、2つのことを意識して取り組みました。1つは、いま持っている力を存分に発揮して制作すること。2つめは、ギャラリースペースを生かした展示にすること。102教室はとても広いので、スペースに合ったボリューム、そしてスケールの大きい作品に挑戦したいと思いました。今まで作っていた作品を具体的な空間に落とし込むことによって、初めて作品をより引き立たせることができました。また展示期間中はなるべく会場にいて、来てくれた方に作品の説明をしたり、アドバイスや感想をもらったりしました。この、展示を見てくれた人の意見を直接聞くということは、とても重要なことです。言葉だけでなく、その人の表情や声色でどう見られているか伝わってくるからです。多くの方に見てもらうことで、思いもよらない発見をすることができます。

これは展覧会をしてみなければ決して得られないものです。この経験を生かし、これからも制作活動続け、積極的に展示に参加していきたいです。

飯塚 茜 (ビジュアル・アーツ学科3年)

Masukawa



展示の良いところは様々な人に作品を見て貰えることです。

今回の学内での展示では、芸術学部以外の学科の方にも作品を見て戴きました。多くの方の意見や感想、アドバイスを聞いていく中で、自分では思いもしなかった見解を聞く事もできます。違った視点から自分の作品を見ることができるのは、自分の絵の表現や価値観を広げることが出来る良い機会にもなりました。

増川 優希 (ビジュアル・アーツ学科3年)

*学年はいずれも当時

日時 2012年10月11日 17:00—18:30
会場 玉川大学3号館102教室
講演者 近藤健一(森美術館キュレーター)
企画 林卓行

報告

2012年、東京、六本木の森美術館で開催されて話題を呼んだ
展覧会《アラブ・エクスプレス》。その企画者であり、展覧会の
実現にあたって数多くのアラブ諸国の現代美術を調査した森美
術館キュレーター、近藤健一氏を学外より特別講師にお迎えし、
開幕に至る経緯や展示作品についてお話をうかがいました。
おりしも「ジャスミン革命」と呼ばれる民主化運動がアラブ諸国
で広がり、日本でも話題になりましたが、依然としてアラブ社
会とその美術は、おおくの日本人からは遠く感じられるもの
でもあります。
近藤氏は展示作品について、またその社会的な背景について丹
念に紹介され、「グローバリゼーション」の言われる時代におけ
るアラブ美術の位置づけ、そしてそれをつうじてこそ見えて
くるアラブ世界や日本との意外な共通点について、お話しくだ
さいました。

林 卓行 (ビジュアル・アーツ学科准教授)



近藤 健一 こんどうけんいち

略歴

森美術館キュレーター

1969年生まれ。

1999年 ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ美術史修士課程修了。

2003年より森美術館に勤務。

同館にて「英国美術の現在史：ターナー賞の歩み展」(2008)。

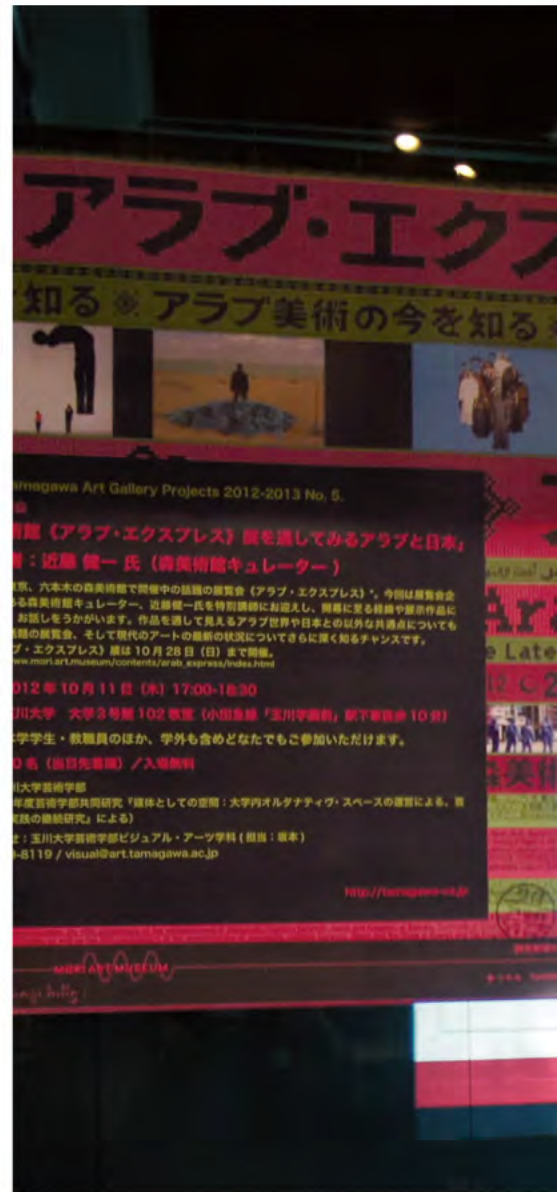
「六本木クロッシング2010展」(2010)。

「アラブ・エクスプレス展」(2012)を共同企画、

「MAMプロジェクト018：山城知佳子」展(2012)を企画。

そのほか、2010年にはローマの非営利ギャラリー、サラ・ウノで

若手日本人のビデオアート展を企画。



会期 2012年10月15日—11月8日
会場 玉川大学3号館102教室
報告会 10月16日 17:00—19:00
関連授業 海外特殊研究(ドレクセル)

報告

2011年に引き続き、「海外外特殊研究(ドレクセル)」を履修した10名の学生が、米国フィラデルフィアにて一週間の研修とドレクセル大学にて一ヶ月間の藍染め作品展を開催しました。本展示は凱旋展として米国で展示した着物8点を含む藍染め作品17点を展示し、会期中に報告会を実施しました。報告会では日本での事前授業、米国でのワークショップやデモンストレーションの様子、ドレクセル大学での正規授業参加の内容を伝え、芸術学部の教員や学生の他、継続学習クラスで染色を学ぶ方々等にご参加いただき、世代や立場を超えた交流が実現しました。

藤枝 由美子(ビジュアル・アーツ学科 准教授)

企画者

青木 理子(ビジュアル・アーツ学科 4年)
西川 貴博(メディア・アーツ学科 3年)
渡邊 宏樹(メディア・アーツ学科 3年)

出品者

伊藤 純恵(ビジュアル・アーツ学科 3年)
豊島 香耶(ビジュアル・アーツ学科 3年)
白井 杏奈(パフォーマンス・アーツ学科 3年)
諸見里 聖(メディア・アーツ学科 3年)
高橋 紀子(ビジュアル・アーツ学科 4年)
山本 洸矢(ビジュアル・アーツ学科 4年)
吉田 茉莉子(ビジュアル・アーツ学科 4年)

*いずれも当時

JAPAN BLUE

Tamagawa
Art Gallery Projects
2012—2013 no. 06



林三雄「みつおのみっつの仕事」展

no. 07
2012—2013

会期 2012年11月29日—12月12日
会場 玉川大学3号館102教室
トーク・イベント 林三雄 12月6日 17:00—18:00
企画 林三雄

報告

人は職業としての仕事だけでなくいくつかの仕事を持っています。私はビジュアル・アーツ学科の教授としていくつかの授業を行い、大学の学務的業務をこなすことを仕事としていますが、同時に個人研究として照明にかかわる調査を行うことや、自発的な造形活動も行うほかに、日常生活のなかで家の掃除をしたりごみを捨てたりということも私の仕事です。今回の展示は数多ある私の仕事の中から造形的な取り組みとして私が継続的に行っている3つの仕事にフォーカスして構成したものです。

林三雄（照明研究／ビジュアル・アーツ学科 教授）

トーク・イベント

企画・制作者、林三雄による作品解説が行われました。
学外からも多くの方に来ていただきました。

展示作品

《BANANA》 2008年ANBD

《NUTS》 2009年ANBD

《ASAGAO》 2010年ANBD

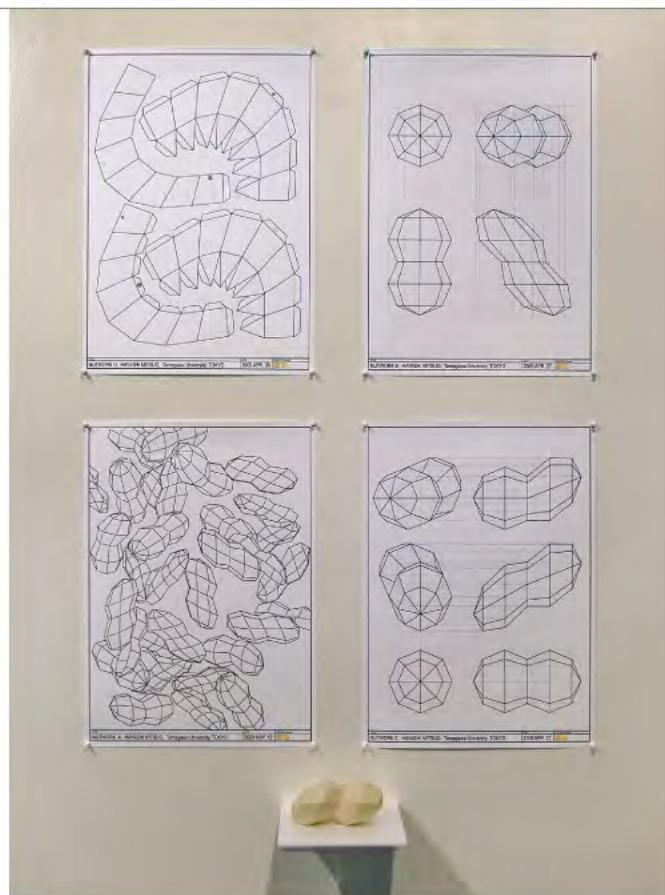
《HEART》 2011年ANBD

《原寸大 下駄／座布団／酒／割箸》 2012年ANBD

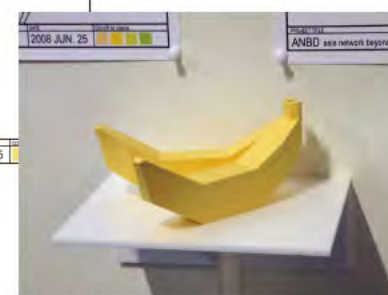
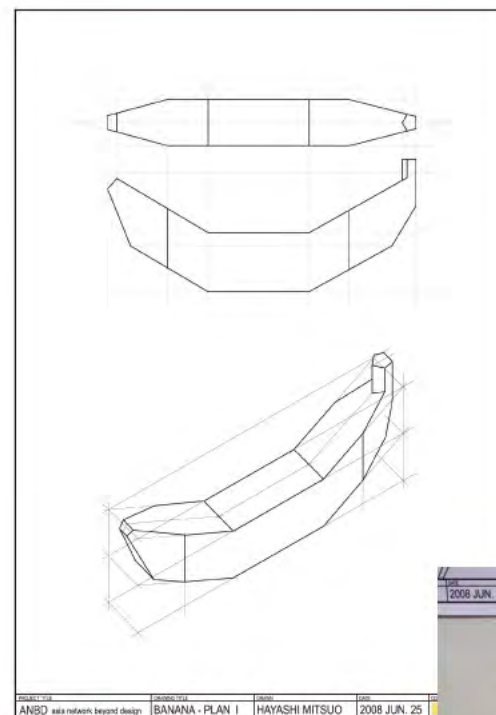
《餅花》

《光の景・観光写真》

《光の景・文学作品より抜粋／PCデータ》

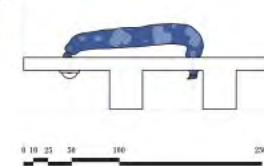


《NUTS》



《BANANA》ペーパーモデル

Tamagawa
Art Gallery Projects
2012—2013 no.



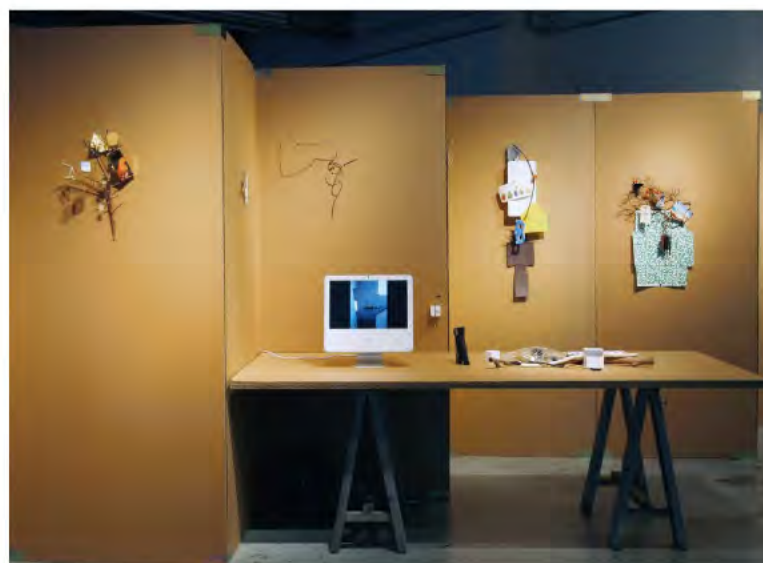
ひとつ「2D-3D」

2008年から始まったANBD(アジア・ネットワーク・ビヨンド・デザイン)展に出品した作品です。私は照明デザインの仕事に従事していましたが、そこで自分がデザインした形を伝えるために必要な手段として最大に有効なものの「図面」を会得することができました。平面上に表された指示書「図面」をもとに工場で立体の製品がつくれる面白さに夢中になりました。ANBD展ではアジアの4地域に4つの作品を公開するのですが、テーマに基づき「基本図面」「立体図面」「展開図」「グラフィック」の4点を制作しています。通常は立体の展示はしないで図面から立体を想像してもらいますが、このたびはペーパーモデルを展示しました。

Mitsuo
Hayashi

ふたつ「餅花」

これらは自宅のあちこちに置かれているオブジェです。その状況写真も併せて見ていただきました。拾ってきた木の枝に既成の物品をからませています。幼いころ旧正月に茶の間に餅花を飾るとき、それを作る工程に熱中した記憶があります。七夕の笹飾りやクリスマスツリーにオーナメントを飾るといった、木の枝に装飾を施すことは何かワクワクする造形行為です。幸福を祈る願掛け、豊穡、そこには何かしらの精神的な祈りがあるのではないのでしょうか。



会場風景



《餅花1》

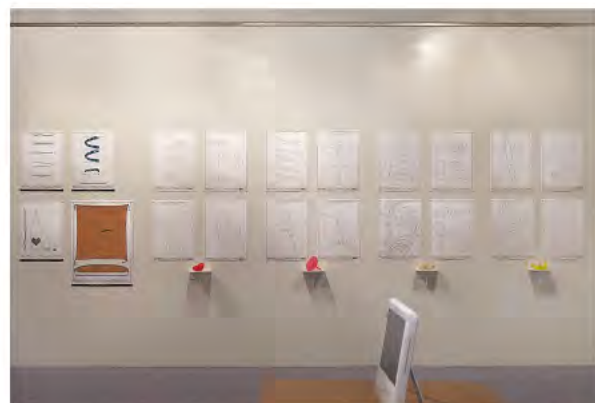


《餅花2》

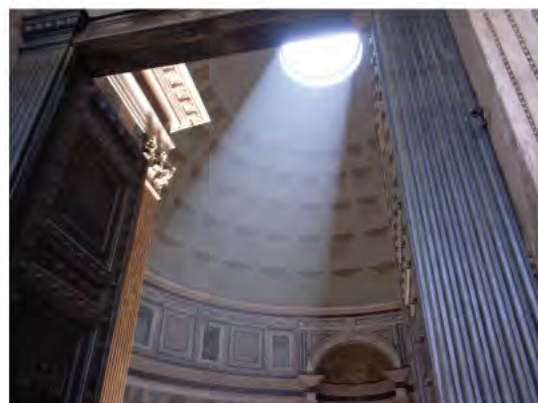
みっつ「光の景」

照明のデザインの仕事から離れ、1997年から取り組んでいる照明研究の中間発表です。文学の中の灯りの表現と新聞記事などからの情報をもとに文字データとしてまとめたものと、光の情景(観光写真)を展示しました。いずれこれらを体系化してデータベースを作ること为目标に取り組んでいます。

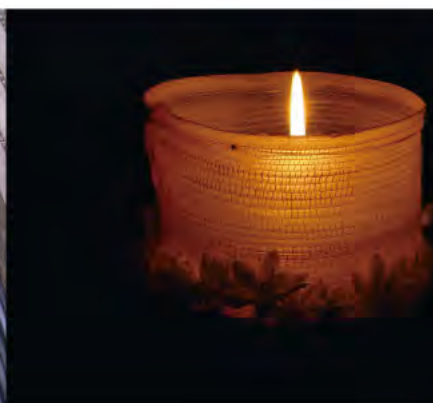
武蔵野美術大学・面出薫ゼミ(光のゼミナール)のお手伝いではこれらの文章を朗読する授業も行いました。



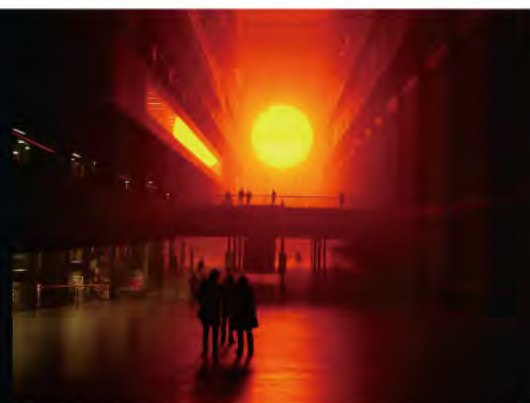
会場風景



観光写真 ローマ



パリ



ロンドン

日時 2012年12月19日 17:00—19:00

会場 玉川大学3号館102教室

パネリスト 林卓行+東方悠平+吉田聡

企画 林卓行

報告

今夏、ドイツのカッセルで開催された大規模な現代美術展 dOCUMENTA (13) の調査を行った本学教員の林卓行と、同展をアーティストの眼で観てきた東方悠平、吉田聡による報告会です。同時に2012年に話題となった内外の展覧会やアーティストの話題を手がかりに、現代美術の現況について率直な意見交換を行いました。

会場ではパネリスト3名が3つのPCとプロジェクターを同時に使用して、三面マルチスクリーンで資料を提示。写真のほか、インターネット上の情報にリアルタイムでアクセスしながらレクチャーすることにより、活気ある討論の空間が実現しました。なお「ドクメンタも急襲!」というタイトルは、2011年におなじ会場で実施された「ヴェネツィア急襲!」の討議を継続するものであることを示しています。

林 卓行

dOCUMENTA(13) について

“documenta”は4年、あるいは5年にいちどドイツの都市カッセルで開かれる、現代美術の大規模展です。その規模とコンセプトから世界中の現代美術関係者、あるいは愛好者の注目を集める展覧会ですが、毎回ひとりのディレクター選出され、そのディレクターが中心となって世界中のアーティストを招聘、カッセル市街の各所で作品展示が行われます。

1955年の第一回にはじまり2012年で13回目を数えるこの展覧会では、様々な伝説的な作品が公開されてきました。なかでもパブリック・アート／オフ・ミュージアム的な傾向、つまり美術館やギャラリーのような展示施設を離れて、駅や公園、広場などひとびとがリアルに生活する空間のなかでの展示が積極的に行われてきましたが、今回のdOCUMENTA(13)ではその傾向はさらに顕著に。市街地の古い映画館での映像作品上映や、衣料品店の倉庫をそのまま使ったインスタレーション作品が目玉を惹きました。

また第二次世界大戦後に東西に分断されたドイツの「西側」ではじめられたこの展覧会には、「社会」や「政治」の問題をとりあげる作品も多いという特徴があります。近年は、現代美術全体でそうした政治的なテーマを扱うことがひとつの潮流になって

パネリスト

林 卓行 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)

東方 悠平 (アーティスト/
ビジュアル・アーツ学科 2008—2011年度 助手)

吉田 聡 (ビジュアル・アーツ学科 2009年度 卒業生)



Tamagawa Art Gallery Projects

2012—2013 no. 08

おり、この特徴もさらに顕著になっていました。とりわけ「アラブ・エクスプレス」展の場合と同様、この展示のはじまるすこしまえに「ジャスミン革命」を経験し、またドバイやアブダビなどにおける経済発展でも世界の注目を集める中東のアーティストたちが、今回は大きな役割を果たしています。

もうひとつ今回の特徴だったと思われるのは、いわゆるリレーショナル・アート（ひととひととの「つながり＝リレーション」を創出する美術）系の作品に印象深いものがおおかったことです。障害のあるひとにダンスなどステージで思い切り自己表現してもらったあと、率直に自身の心情を語らせるジェローム・ベルの作品「障害者の劇場」。あるいは明かりの入らない真っ暗な部屋に集団のパフォーマーを配置して踊らせる（観客がその室内にいる状態で）ティノ・セーガル作品などが今回の注目作であったことに、異論はすくないでしょう。

いっぽう、今回のドクメンタを、中東の社会問題といいリレーショナル・アートへの接近といい、「いかにもわかりやすい現代アート」の展示となっていたことを理由に批判する声もあります。とはいえ、こうして毎回賛否両論が起るのも、このドクメンタならではの特徴です。

林 卓行

discussion on

dOCUMENTA(13)



会期 2013年1月7日—1月22日
会場 玉川大学3号館102教室
企画 藤枝由美子

趣旨

実験工房のメンバー山口勝弘氏の絵画やドローイング、そして印象派ドローイング研究の第1人者でありイギリスの絵本作家、ニック・ウェドレイ氏のドローイングを展示する二人展です。

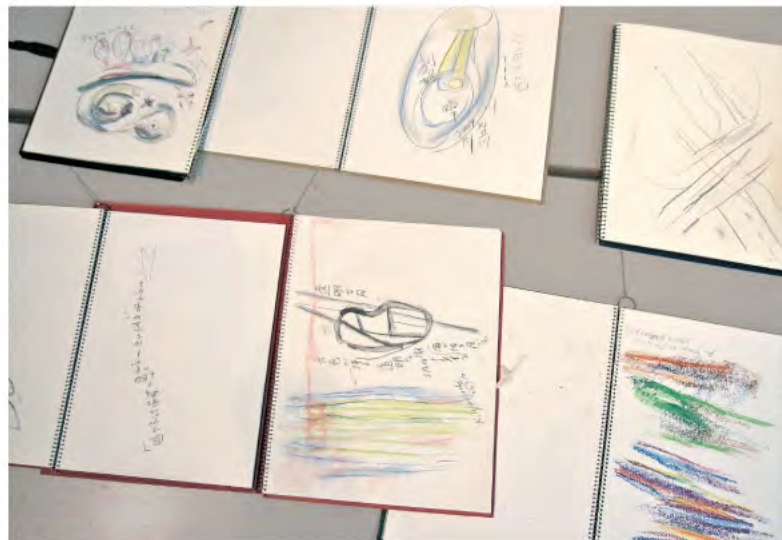
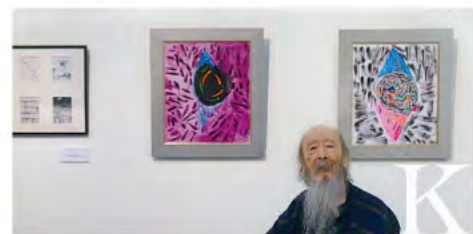
報告

本展では山口氏の最新作絵画3点とスケッチブック9冊、そしてイギリスから送られたニック氏の原画を含む26点のドローイング作品、2冊の絵本を展示しました。

藤枝 由美子 (ビジュアル・アーツ学科 准教授)

有名なドローイングではダ・ヴィンチの手帳があります。この場合は彼の頭に浮かんだ思いつきをメモ書きしているのです。今度の二人展もそうした思いつきを美しく描いてあります。Nickさんの場合は、自分がおかれている立場を皮肉な目で描いています。従ってそこにはユーモアが漂っています。僕はあの小説家夏目漱石の名作吾輩は猫であるを思い出しました。英国紳士の心の目が描かれています。私の場合はアイディアのメモ描きです。これも私の心の目が見た夢のようなものです。いずれも見る人はこの二人の心の目を推理して下さい。

山口 勝弘



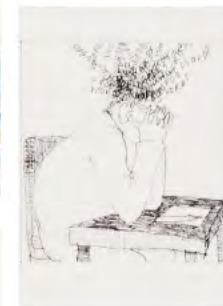
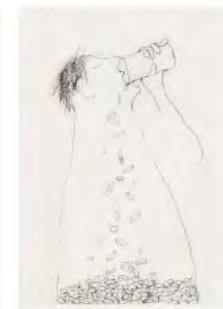
山口勝弘 スケッチブック

Katsuhiko Yamaguchi



山口勝弘 作品

Nick Wadley



ニック・ウェドレイ 作品

Tamagawa Art Gallery Projects 2011-2012, 2012-2013 活動報告書

玉川大学芸術学部

ACTIVITY REPORTS

College of Arts, Tamagawa University [編]

協力／助成

平成23年度 玉川大学芸術学部共同研究：

『大学内オルタナティヴ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』

研究代表者：林卓行（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

研究分担者：椿敏幸（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

同：藤枝由美子（ビジュアル・アーツ学科 助教）

同：東方悠平（ビジュアル・アーツ学科 助手） いずれも当時

平成24年度 玉川大学芸術学部共同研究：

『大学内オルタナティヴ・スペースの運用による、芸術教育の実践とその効果の測定』

研究代表者：藤枝由美子（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

研究分担者：林卓行（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

同：椿敏幸（ビジュアル・アーツ学科 准教授）

同：ジョナサン・リー（メディア・アーツ学科 准教授）

特別協力

玉川大学芸術学部ビジュアル・アーツ学科助手 坂本のどか

報告書デザイン 松本朋子デザイン室

発行日 2013年3月31日

発行 玉川大学芸術学部

〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1

tel 042-739-8119（ビジュアル・アーツ・スタッフルーム）

印刷 株式会社グラフィック

ACTIVITY REPORTS

玉川大学芸術学部

College of Arts, Tamagawa University